

---

# 仮面ライダーディケイド～運命の破壊者～

吉田眼鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜運命の破壊者〜

### 【Nコード】

N5358K

### 【作者名】

吉田眼鏡

### 【あらすじ】

何かと不幸に見まわれる少年、よしやひろゆき吉矢寛幸

彼はある日ディケイドライバー……のおもちゃらしき物を拾った。

だが、それはおもちゃなどでは無く――

彼の“運命”を破壊する旅が始まる。

その瞳は何を見るのか……

P S ・彼の不幸な運命だけは破壊不可能「理不尽だああああ!!」



ブローグ 良太郎ってある意味運が良いよね

「ぎゃああああ!! 死ぬううう!!!!」

ヤバイ! これマジでヤバイ! どれくらいヤバイかっていうとマジでヤバイ!

若干テンパリ気味にそんな事を考えながら俺は自転車を全力でこいでいた。

自転車に付いているサイドミラーから後ろを見る。

そこには、黒塗りの高級車が映っている。

この手の高級車に乗っている人種は大きく分けて二つある。

一つは超お金持ちの人。

そしてもう一つは……

「うーらああああ!!!! 待たんかい、わりやあああ!!!!」

今追っかけて来てるヤのつく自営業の方ああ！！

ヤのつく人は刀傷やら銃弾の跡があるコワモテの顔を窓から出して  
ドスのきいた 声で叫びながら追っかけて来ている。

怖えええ！

ちきしょう！ 何でこうなった！

俺は……俺はただ

「空き缶をゴミ箱に捨てようとしただけなのにいいい！！」

（一時間前）

「あゝ面白かった！」

俺は、まだ胸の中に残るワクワク感をそのままに映画館から出てきた。

「ああ！ 最高だったぜ！」

だぜ口調で同意してくるのは、友人の海藤悠樹だ。かいどう ゆうき

「おやっさん、格好良かったぜ」

「ディケイドも凄かったよな」

この発言から分かると思うが、さっきまで俺達は、仮面ライダーW  
&ディケイドの映画を見ていたのだ。

「最終回の時に激怒したのが嘘みたいだぜ」  
悠樹がしみじみとした様子で言う。

「全くだな！」

テレビの最終回の時はマジで激怒したな。

は？ 何コレ？ ケンカ売ってんの？ って思った程だし。

まあ、今となってはそれも吹き飛んだけどな。

それぐらい面白さがあの映画にはあった！！

「ところで、寛幸ひろゆきこの後どうするんだ？」

ひとしきり映画について語ると、悠樹がそんな事を聞いてきた。

あ、ちなみに寛幸ひろゆきってのは俺の名前ね。

「まあ特に用事も無いし、真つすぐ帰るつもりだけど」

悠樹は何でそんな事聞いてくるんだ？

「そうか……寛幸……」

悠樹が俺の肩に手を置く。  
その顔は真剣そのものだ。

いや……だから何でそんな顔してるんだよ。

「死ぬなよ」

「何でだよ!?! 真っすぐ帰るって言ったただけだろ!?!」

「いや、だってお前めちやくちゃ運悪いだろ？　いつも何かしらに巻き込まれてるぜ？」

「不吉な事言うんじゃねえええええ！」

確かに俺は異常なまでに運が悪い部類に入るだろう。

路地裏を歩けば、十中八九不良に遭遇するし、銀行に行けば銀行強盗と鉢合わせた。

旅行に行った時なんか近隣に潜伏してた指名手配犯と命がけの鬼ごっこをする羽目になるという……

あれ？ 何か目の前が霞んできた気がする。

「じゃあ今日の星占いの結果言ってみろよ。どうせまた最下だろ？」

悠樹がバカにしたように言ってきた。

「……いだ……」

「ん？ 何だ？ 聞こえないぜ？」

「七位だ……!!」

「……」

悠樹が沈黙した。

「……えーと……おめでとうって言った方がいいのか？」

「やめろよ！ 変に気を使われると逆に悲しいわ！」

確かに星占い見て最下位じゃなかったのは初めてだけだな……

「と、とにかく！ 今日と比較的運が良いんだからそう簡単に不幸な目にあつてたまるかよ！」

「知らないのか？ 上。当麻は星占い一位でも圧倒的な不幸に襲われたんだぜ！」

「嫌なこと言つなああああ！！！」

俺は、あそこまで不幸体質じゃない！

……たぶん……

「つーか、この話しはもうやめろ。死亡フラグが立つだろ！」

俺がそう言つと悠樹がフツ、と笑う。

「残念だったな！ 死亡フラグなら、俺がこの話題を振った時点でとっくに立ってるぜ！」

ブチッ！

「何誇らしげに言つてんだこの野郎！！！」

「ひでぶっ！」

気づけば悠樹にアップercutを叩き込んだ。

北。の拳のザコ敵のような声を上げながら吹っ飛んだ悠樹を無視して、自転車に乗ってその場を後にした。

\*\*\*

俺は今、当初の予定通り家に真っ直ぐ帰っている。

無論、辺りを警戒しながらだ。

悠樹が無駄な死亡フラグを立てるから、警戒しなきゃいけない羽目になった。

……やっぱもう一発殴ったときゃ良かったかな？

ランコロン

自転車を走らせてると、突然空き缶が目の前に転がってきた。

キキィー！！

とっさに急ブレーキをかけて自転車を止める。

「あつぶねえ〜！」

何でこんなジャストタイミングで空き缶が転がってくるんだよ。

しかもこれ、スチール缶だし。

このまま踏んでたら盛大に転んでたな。

「警戒しなくて良かったぜ」

つか、近くにゴミ箱が有るんだからちゃんと捨てるよな。

そう思いながら空き缶をゴミ箱に投げた。

この時俺は、トラブルを一つ避けた事で警戒心が少し緩んでいたんだろう。

投げた空き缶は綺麗な放物線を描き、ゴミ箱に……入らなかった。

カァンという、かん高い音を立てて弾かれた空き缶は完全にあさつての方向に飛び、そして……

ズルッ

ベシヤッ！

ガン！

「ぐわああ！」

何故か近くにいた、人の足下に転がり盛大にすっ転んだ。

「うぐぐ、貴様ああ」

転んだ人が睨みを利かせてくる。

どう見ても、ヤのつく自営業の方ですね、本当にありがとござい  
ました。

じゃなくてっ！

「に、逃げろおーーーーっ」

「待てやゴラァー!!」

く冒頭に戻る

と、言うわけでどこかの借金執事よろしく自転車で車をぶっちぎら  
なきゃ生けない（誤字にあらず）羽目になったんだ。

あれ？ おかしいな。

何だか目の前が霞んできた。

つーか星占いあてにならないじゃねえか！！

悪い運勢の時は無駄に当たる癖くせにiiiiiiii！！！！

カランコロン

どこからか空き缶が転がってきた。

けど、全力疾走だから避けられないわけで……

「うわっ！？」

当然、盛大に転んだ。

そこまでなら、まだ良かったかもしれない。いや、良くは無んだけど。

問題は転んだ先の着地点だ。

着地点……つーか、何も無い。崖だ。

しかも、割と高い。

それに気づいた瞬間、全身の血の気が引いていくのを感じた。

「うわあああああ！！？」

死亡フラグってこれだったのかな？

俺は、そんな事を考えながら目を閉じた。

\*\*\*

「あれ？ 生きてる？」

俺は木の枝と枝の間に自転車ごと挟まっていた。

例えるなら電王第一話の良太郎みたいな感じだ。

「よっしやああああ！！！！ 生きてる！！ やっぱり星占い七位  
は伊達<sup>だて</sup>じゃ無かった！！」

ヤのつく人に追われてる時点であれな気もするがこの際気にしない  
事にしよう。

ヤのつく人もさすがに崖の下まで追っかけてこないだろうし、むしろ死んだと思って諦めてるだろう。

自転車はおしゃかになったけど、まあ命には変えられないし。

何にせよ、これで死亡フラグは叩き折れた！

「ん？」

木から下りた俺は、足下に何かが落ちてるのに気づいた。

「これは……」

拾い上げたそれは、多少の土埃つちぼろにまみれているが、ごく最近に見た覚えがあった。

「ディケイドライダー？」

そう、それは仮面ライダーディケイドの変身ツール、ディケイドライバー……のおもちやしき物。

近所の子供が落としてもしたのか？

「しゃーない、帰るついでに交番に届けるか」

そう呟き、歩きだした。

この時、俺は気づいていなかった。

この行動が、俺の“運命”を変えたという事に。

次回、仮面ライダーディケイド 運命の破壊者

「君が持つてる“あれ”を渡して欲しくてね」

「何でイマジンが現実世界にいるんだよおおおお！？」

「今、全ての世界が滅びへと向かっている」

「変身……できるのか！？」

「変身！」

第一話 破壊者誕生！

さだめ  
運命を破壊し全てを守れ！



## 第一話 破壊者誕生（前書き）

どうも、吉田眼鏡です。

更新が遅くなつてすいません。

しかも出来にはあまり自信が無いです。

## 第一話 破壊者誕生

くデネブ side

「今……何て言った？」

侑人が凄く不機嫌そうな顔をしてる。

いや、間違いなく不機嫌だ。

侑人の目がかーなりつり上がっている。

そんな侑人に俺はおどおどしながら謝った。

「ご、ごめん侑人。 “あれ” を落としちゃったんだ」

俺がそう言った瞬間、侑人がつり上がった目をさらにつり上げた。

「デーンネーブルーー！！」

あ、わわわ、侑人がすっごく怒ってる。

「あれほど無くすなって言っただろーっ！！」

侑人が素早い動きでチョークスリーパーを掛けてきた。

「い、痛たたたた。侑人、ごめん！ 本当にごめん！」

痛い、凄く痛い。けど、俺が悪いし謝るしかない。

「お前、“あれ”がどれだけ重要か分かってんのか！ お前がどうしてもって言うから預けたんだぞ！」

うう、確かに俺が侑人に無理言っただけで持たせてもらっただ。

“あれ”を狙ってる奴らが襲ってきた時、俺が持っていれば侑人じゃなくて俺を攻撃すると思ったから。

俺は“イマジン”で頑丈だからちよつとの攻撃ぐらい大丈夫！  
と思っただけで、完全に裏目に出ちゃった。

「ふう」

侑人がようやくチョークスリーパーから解放してくれた。  
うう、痛かった。

「デネブ、今まで通った道を教えろ。奴らに“あれ”を取られたらかなりまずいからな」

口ではそう言ってるけど侑人が一番心配してるのは、落とした“あれ”を誰か、普通の人が拾う事だろう。

もし、そんな事になったら“あれ”を狙ってる奴らの格好の餌食になってしまう。

侑人は優しいからきつと心の中ではそう思ってる！！

「えへへへ」

「何だよ、何笑ってんだよ？」

「やっぱり、侑人は優しいな〜って」

「バカッ！ 何でそうなるんだよ！」

侑人が殴ってきたんだけど俺の体は硬いから……

「痛っ」

「ああっ！ 侑人、大丈夫？」

拳を痛めてしまった侑人に駆け寄って行った。

〈デネブ side end〉

〈侑人 side〉

たくっ、あのデネブ（バカ）は、“あれ”を無くすなんて……

やっぱり預けなきゃ良かった。

大体、デネブを盾か弾避けみたいにするこの提案、何となく気に食わなかったんだ。

それをデネブがどうしてもって、しつこく言ってくるもんだから……

まあ、過ぎた事はいい。

今、俺はデネブに案内されて今まで通ったらしい道を歩いているわけだが……

「おい、デネブ。本当にこんな所を通ったのか？」

声に若干の怒りがこもっている気がするがそれはどうでもいい。

「うん。そうだよ」

デネブが能天気な声で言うがそれもどうでもいい。

問題なのは……

「デネブ、本ッ当ににこんな森の中を通ったのか……！」

そう、俺達が今歩いているのは少々深い森の中。

このデネブ（バカ）は何を思ったのか、こんな森の中を歩いていたらしい。

「侑人！ “こんな森”なんて言っちゃ駄目だ！ 綺麗で空気もいい、立派な森じゃないか……！」

「このっバカッ！ そういう意味で言ってるんじゃない……！」

たくっ、こいつは相変わらずズレてるな。

「俺が言いたいのは、本ッ気で森の中に“適合者”がいると思った

のか？」

“あれ”の適合者を探すこと。

それが俺達が“この世界”に來た最大の目的だ。

「え？ いや、とりあえず隅々まで探しておかないとなつて」

「こんな所にいるのは木こりか遭難者ぐらいしかいないだろ！！」

「遭難者！？ 大変だ！ 早く助けないと！」

「例えの話だ！」

はあ、こいつと話してると疲れる。

「ん？ ねえ侑人、あれ何かな？」

デネブが木の上辺りを指差したので見てみると……

「……自転車だな」

何でこんな所に自転車が？

気になって周りを見渡すとまず目に入つたのはいくつかの枝が折れた木。

折れた枝をたどっていくと幾分か高い所にひしゃげたガードレールがあった。

……まさかとは思うが

「あそこから落ちたのか？」

いや、さすがにそれは無いよな。

野上じゃあるまいし。

「デネブ、他をさが…っ！ デネブ！ イマジンだ！」

不意に、イマジンの気配を感じた。

どうやらデネブが“あれ”を……ディケイドライバーを落としたのはここで間違いなさそうだな。

く 侑人 side end

く 寛幸 side

あの後、俺はディケイドライバーのおもちゃを持って交番に向かうはずだったんだが……

「迷った」

そう、絶賛迷子中である。

どうやら俺が落ちた場所は思ったよりも深めの森だったみたいで、もうここがどこやら分からなくなってしまった。

「どうしよう……」

とりあえず歩く。

ひたすら歩く、歩く、歩く、あるk「おい、その君」

「!？」

き、奇跡だ！ 人がいた。

正直、もう駄目かと思ってた。

振り返るとそこには、いかにも紳士！ って感じのステッキを持った男性がいた。

「あ、すいません。俺、道に迷っちゃったんですけど。出口知りませんか？」

とりあえず、速攻で道を聞いてみる。

……まさか、この人も迷子だった、ってオチは無いよな？

「ああ、それなら、あっちを真っすぐ行けば出られるよ」

おおっ！ 見かけ通り親切な人だ。

予想してたオチも無いし万事解決だ。

「ありがとうございます。ところで、俺に何か用事があったんですか？」

声をかけて来たって事は彼にも用があつたんだろう。

「ああ、それなんだけどね……」

？ 何故か嫌な予感がする。

「君が持つてる“あれ”を渡して欲しくてね」

そう言つと彼の体から砂がこぼれ落ち、その砂がイメージー仮面ライダー電王の怪人―へと変貌した。

「は?!」

俺は啞然とした。

だって仮面ライダーはフィクション、つまり現実じゃないわけで、怪人も現実には存在するはずはない。

なのに、今日の前には間違いなくイメージンがいる。

今の現れ方はトリックとかそういう物でごまかせるレベルじゃない。つまり本物というわけで……

そこまで思考が回つた時点で全速力で逃げた。

「待ちやがれええ!!」

イメージンも当然追いかけてくる。

「待てるかああああ!!」

律儀に待ったら捕まるだろ！

ていうかそもそも……

「何でイマジンが現実世界にいるんだよおおおお！……！」

しかも、何で追いかけてくるんだよ。

俺が持つてる“あれ”って何だよ？！  
全然分かんねえよ！

「うわっ！」

何とも間の悪い事に俺は木の根につまづいて転んでしまった。  
何だこのベタな展開。  
ホラー映画なら完璧に死亡フラグな展開じゃねーか！

「ははははははは！ もう逃げられないぜ」

イマジンが迫ってくる。

やばい、早く逃げないと。

だが足が木の根と根の間に挟まって動けなくなっていた。

つくづくなんてベタな！

「死ねーッ！」

やばい、もう駄目かも。

そう思った瞬間。

——銃声が響いた。

「ぐわあ！」

突如、銃弾が撃たれ、イメージがひるんだ。

「大丈夫？」

その言葉と共に現れたのは……

「デ、デネブ?!」

そう、そこには金色のカラスの仮面のような顔、忍者のような鉄の額当てに黒いローブのような服を着た、仮面ライダーゼロノスの変身者、桜井 侑人の契約イメージであるデネブがいた。

「え？ 俺の事知ってるの？」

デネブが不思議そうに聞いてくる。

まあ、初対面の人が自分の名前を知ってたらそつだよな。

「バカっ！ デネブ！ ここは“そういう世界”だって説明しただろ」

！？ 侑人まで現れた！？

「あっ！ そうだった。えーと、これは、その……撮影で……CGで……」

デネブがあたふたと説明してくるが、そんなに慌ててちゃ、嘘ですって言ってるようなものだぞ。

「デネブ、もういい。とりあえず話しは、あのイメージンを倒してからだ」

そう言うと、侑人はゼロノスベルトを腰に巻き、左腰からゼロノスカードを取り出してバツクルのレバーを引いた。

和風のミュージックホーンが鳴り、侑人はゼロノスカードをバツクルにアップセット（挿入）する。

「変身！」

『アルタイルフォーム』

電子音が鳴ると侑人の体が、中央にレールのようなものが走る黒いボディスーツに包まれる。

そこからさらに、組み立てるかの様に緑色の装甲が胴体に次々と装着される。

そして頭の上から牛の形をした二つの電仮面が顔に向けてレールの上を走ってくる。

顔の上に電仮面が来ると変形、結合し、緑色の複眼となると変身完了。

侑人は、仮面ライダーゼロノスに変身した。

「最初に言っておく！ 俺はかーなり強い！！」

決めゼリフと共に腰の携行武器、ゼロガッシャーを連結させていき、サーベルモードにする。

「はあああ！」

素早い動きで駆け抜け、イマジンにゼロガッシャーを振りぬく。

「うぐっ！」

怯みながらも、イマジンは仕返しとばかりにゼロノスに何度も殴りかかるが身軽な動きで全てかわされた。

それどころか攻撃後の隙を狙われ、何度も斬りつけられていく。

「ぐわあ！」

ゼロノスに蹴り飛ばされて、イマジンが倒れた。

その際にバックル上部のスイッチを長押しする。

『フルチャージ』

バックルから引き抜いたゼロノスカードをゼロガッシャーに装填するとフリーエネルギーがゼロガッシャーに充填され、光り輝く。

「はあっ！」

横一文字に振り抜かれたゼロガッシャーから光の刃が飛ぶ！

それはイマジンにAの字を刻み、イマジンに炸裂した。

「ぐ、ぐわあああああ！！！」

断末魔の悲鳴と共に爆音を立ててイマジンが爆散する。

それを確認すると侑人はベルトを外し、変身を解いた。

すると手に持っていたゼロノスカードが粒子状になって消滅していった。

さて、半ば実況役になっていた俺の所に侑人がやって来る。

「撮影にご協力ありがとうございました」

こちらに来るなり侑人はこう言った。

「へ？」

ま、まさか侑人……

「今までの出来事は最新機器の実験とドッキリを兼ねた撮影なんです」

この期におよんでごまかす気だー！ーっ！

「いやいやいや！ 最新機器とかでどうにかなるレベルじゃ無いでしょー！！」

最新って言うときゃ何とかなると思ったたら大間違いだ！

「いえいえ、今までののは全部CGなんです」

「バカッ！ デネブ！」

侑人がデネブのセリフを咎めるがもうバツチリ聞いちゃったから遅いと思う。

「……CGは画像に働きかける技術だから肉眼には効果無いんだけど」

「ええっ！ そうなの！？」

「デーンブー！！」

激怒した侑人にデネブがプロレス技を掛けられている。

「痛たたた、侑人ごめん！」

デネブが謝ってるけど、侑人がプロレス技を緩める気配は無い。

「……どういふ状況か聞きたいんだけど、良いか？」

俺がそう言つと侑人はデネブをプロレス技から解放した。

「はあくしょうがないから説明するか」

ため息をつきながら侑人は語り始めた。

「察しの通り、俺達は本物の桜井侑人とデネブだ。俳優や声優じゃない」

「やっぱりか…でも何で本物の侑人達がいるんだ？」

本来なら侑人達は架空の存在だ。

この世界にいるのはおかしい。

侑人はこちらの意図を察したらしく説明を始めてくれた。

「平行世界……もしもの世界の概念を知っているな？」

「ああ」

侑人の問いに頷いて返す。

「平行世界は様々な“可能性”がある。この世界では仮面ライダーはフィクション（架空）……特撮として扱われている。だが、俺のいた世界では仮面ライダーはノンフィクション（現実）の存在だ」  
なるほど……その考え方で言えば、アニメや漫画、小説の世界もあり得る。

もしくは俺の存在がフィクション（架空）の存在である世界もあるかもな。

「俺達は、この世界で仮面ライダーと呼ばれる特撮に極めて近い平行世界から、ある目的のために来たんだ。……イマジンに襲われたって事は“あれ”を拾ったんだろ？ 渡してくれ」

「“あれ”って何なんだ？ イマジンも言ってたけど、分からないんだ」

「それは……うわっ！」

侑人が何かを言おうとした瞬間、突然ステンドグラスのような模様の入った怪人、ファンガイアに襲いかかれた。

「くくくつ、ゼロノスのベルトは頂きましたよ」

ファンガイアが見せびらかすようにゼロノスベルトを掲げた。

この声は……さっきのイマジンの契約者の声！  
ファンガイアだったのか。

「くっ！」

「侑人！？ 大丈夫か?!」

デネブが侑人の安否を気づかう。

「これでもう戦えませんか。さあ、その君が持っている“あれ”を渡して貰いましょうか」

「だから、“あれ”って何の事だよ!？」

「おや？ 惚ける気ですか？ ならば力ずくで行かせて貰いましょうか!」

ゼロノスベルトを遠くに投げ捨てて、ファンガイアがこちらに向かって襲いかかってくる。

「させるか!」

デネブもファンガイアに向かっていく。

「うおおおお!」

デネブがファンガイアに殴りかかる。

ファンガイアはそれを腕で受け流した。

「はあっ!」

負けじとファンガイアも拳を振るう。

デネブはそれをもう片方の腕で防いだ。

「はあああああ!!」

「ふんっ!!」

ドカッ! バキッ! ドカッ!

そのまま殴り合いになる。

「まずい、デネブが押されてる」

一見、互角の戦いに見えるがデネブの攻撃は全て受け流され、ファンガイアの攻撃を何度も受けている。

バキッ!

「ぐわっ!!」

とうとう、デネブが 殴り倒されてしまう。

「デネブ!!」

侑人がデネブに駆け寄って行く。

「くくくっ、さすがにゼロノスであるだけあって中々に強かったですね。しかし、変身もせずに勝てる程私は甘くありません」

ファンガイアはゆっくりとこちらへと迫っていく。

くそっ！ 本気でまずいな……どうする。

「熱っ！」

不意にポケットに強い熱を感じ、ポケットを調べる。

「これは……」

取り出したそれは、ディケイドライバー。

砂ぼこりを被り、ボロボロだったそれは眩い光を放つと、白銀に輝くバックルへと変わった。

「お前、適合者だったのか」

侑人が驚いた様子で言った。

「適合者？ どういう事だ？」

「おい、あんた！ 変身しろ！」

「なっ！？ 変身……出来るのか？！」

「ああ、出来る。お前は適合者だからな」

疑問は幾つか有るが侑人に促されるまま、ディケイドドライバーを腰に着ける。

するとバックルの端からベルトが伸び装着された。

そして左腰に現れた本型のケース、ライトブッカーからカードを取り出し目の前に掲げる。

「変身！」

『カメンライド デイケイド！』

カードをバックルに装填すると周りから複数の残像が集まり、体に灰色のスーツが纏われる。

さらに複数のプレートが顔に突き刺さる様に装着されると体の所々がマゼンタ色に染まり複眼が緑色に光ると変身完了！

俺は仮面ライダーデイケイドになった。

「バ、バカな！ デイケイドだと！？」

ファンガイアが驚き後ずさる。

「先手必勝！」

『アタックライド ブラスト！』

ライトブッカーを銃に変形させ、連射する。

「ぐわっ！」

ファンガイアが怯んだ隙にライトブッカーを剣に変形させ、デイケイドライバーにカードを装填する。

『アタックライド スラッシュ！』

ジャキン！ ジャキン！

残像を伴ったライトブッカーで二度斬るとファンガイアが吹き飛ばされる。

「くっ、バカな！　いくらディケイドと言えど、さっきまで逃げ回っていた奴が何故ここまで！」

「まあ、確かにさっきは逃げたさ……と言っより俺は基本、厄介事からは逃げる」

まあ、全く自慢出来る話じゃないが、不幸体質気味な俺が厄介事全てに対応してたら体が持たない。

「だけどな……だからって俺が弱いとか言った覚えは無い！」

そう言って金色のカードをディケイドライバーに装填した。

『ファイナルアタックライド　ディ・ディ・ディ・ディケイド！』

スクラッチのような電子音が鳴ると俺とファンガイアの間には大きな光のカードが複数枚現れる。

「はあああああ！！！」

飛び上がり、光のカードを通り抜けファンガイアにディメンションキックを放った！

「ぐわああああ!!」

断末魔の叫び声を上げ、ファンガイアはガラスのように砕け散った。

俺はベルトを外して変身を解く。

「お前が適合者だったんだな」

侑人がこちらにやって来て言った。

「適合者って……ディケイドライバー（これ）のか？」

「ああ、お前は今日からディケイドになった」

俺がディケイド……マジかっ!?

「お前、名前は？」

俺が驚いていると侑人が名前を聞いてきた。

「あ、ああ、よしやひろゆき吉矢寛幸だ。寛幸って呼んでくれ」

「寛幸だな。寛幸、お前に手伝って貰いたい事がある」

侑人は真剣な表情になって語り始めた。

「最初に言っておく、今この世界を含む全ての世界が滅びへと向かっている」

「なっ!？」

全ての世界が滅びるだって!？  
何故そんな事に!？

「原因は分からない……ただ、世界の滅びに関係しているらしい奴らが“ある物”を血眼になって探しているんだ」

「ある物？」

「ディケイドライバーだ」

「なるほどな……」

ピンと来た。

つまりさっきのイマジンとファンガイアはそいつらの一味って事だろう。

「奴らはディケイドが敵に回ると困るらしい」

そこで俺は疑問を感じた。

「かどやつかさ門矢士は？ あいつもディケイドだろ」

そうディケイドの主人公、門矢士。  
士に頼んだ方が早い気がするんだが。

「お前も知ってるはずだ。門矢士は通りすがりの仮面ライダー、消息が掴めるような奴じゃない」

まあ、確かに言われてみればそうかもしれない。

「だからお前には世界の滅びを止める……いや」

侑人は何かを思ったのか言い直した。

「世界の滅びを破壊してほしいんだ」

「……………」

俺は無言で侑人の話を聞いている。

「嫌なら別に構わない。他の平行世界で適合者を探す」

「いや、行くよ」

自分でも驚く程冷静に、そしてはっきりと言った。

「良いのか？」

余りにも早く決断したからか侑人は確認するように聞く。

俺はそれに頷いて返した。

「死ぬかもしれないぞ」

その言葉に溜め息を吐きながら言う。

「日常茶飯事だ……」

「は？」

その時、これまでのシリアスな空気が少しずつ崩れていくのを感じた。

「だーかーらー、命の危機ぐらい日常茶飯事なんだよ！」

「はあああああ！？」

完全にシリアスな空気が崩れたな。

「つーかそもそも今日だけで三回ぐらい死ぬかと思ったし」

「……冗談だよな？」

侑人、気持ちは分かるが顔をひきつらせすぎだ。

「……事実だよ」

やばっ、悲しくなってきた。

「それに今回の件でその世界の滅びに関係してる奴らとやらにも目をつけられただろうしな」

言いながら溜め息をまた吐く。

幸せが逃げる？ とつくに逃げてるよ！

「まあ、とにかくやれるだけやってみるさ」

「……動機はともかく、手伝うならこれを受け取れ」

侑人が一枚のカードを手渡してきた。  
俺はそのカードを観察してみる。

デザインを見る限りディケイドのライダーカードだ。  
絵は無いが文字の部分は読む事が出来た。

「ゲート？ 何だこのカード？」

ディケイドではこんなカードは無かったと思うんだが。

「それは世界を渡る手段の一つ、ゲートのカードだ」

疑問に思った俺に侑人がこのカード、ゲートのカードについて教えてくれた。

このカードはどうやらディケイドにおける写真館の背景ロールと似たような役割を果たすらしい。

また、変身せずに使う事も可能なカードでディケイドライバーに装填すれば発動するらしい。

「大体分かった。つまりこのカードを使って世界を渡り、世界の滅びを邪魔すればいいんだな？」

余談だけど士のセリフ“大体分かった”が言えて微妙にテンションが上がってたりする。

よくよく考えてみれば憧れの仮面ライダーになれるんだ。

あながちアンラッキーとも言切れない。

そう考えたら燃えてきた！

まあ、俺はクール路線で行きたいから顔には出さないけどな。

え？ 今更クール路線は遅い？

何だところあぁあ！！

「手伝ってくれてありがとう！ 侑人も心の中ではとても感謝してるから。あ、これお近づきの印のデネブキャンディです。侑人をよろしく！」

いつの間にか復活したデネブからデネブキャンディを貰った。

よっしゃ！ 本物のデネブキャンディだ！

一度食べてみたかったんだよな。

「おいデネブ、もう行くぞ」

侑人に促されデネブは侑人の元へと走っていく。

そして空から走って来たゼロライナーに乗って去って行った。

「さて、俺も行くか」

早速“ゲート”のカードをディケイドライバーに装填した。

『アタックライド ゲート！』

次の瞬間俺は灰色のオーロラに包まれていった。

ゲートのカードには夜空に輝く月と剣十字を模した首飾りの絵が浮かび上がっていた。

## 次回予告

「死の時間44地区、死人ナンバー444444番……マジかよ！？」

世界の滅びを止める為、旅に出た寛幸。

だが、彼が初めて訪れた世界は死後の世界だった！？

さらに彼の知らない未知のライダーとの遭遇！

果たして彼は世界を救えるのか？

次回、仮面ライダーディケイド！運命の破壊者！

第二話 最初の世界は死後の世界！？

運命を破壊し全てを守れ！  
さだめ

## 第一話 破壊者誕生（後書き）

次回はようやっとリリカルキャラが出るかも……？

次回予告で誰が出るのか大体予想出来るかもしれませんが……

ご意見・感想は常に待ってますのでよろしければお願いします。

では ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5358k/>

---

仮面ライダーディケイド～運命の破壊者～

2010年10月9日01時57分発行